研究発表　分科会 9-2　言説と批評 10 月 15 日（日）15：40-16：20　南館 2B41

趣味のニーチェ的基準について

一橋大学　村山 正碩

本発表では、趣味の良し悪しの基準として、フリードリヒ・ニーチェの議論に着想を得たニーチェ的基準を構築し、それが従来のヒューム的基準に対してもつ利点を示す。

趣味の良し悪しについて語るとき、私たちが問題にしている事柄は二種類ありうる。第一に、私たちは個別の趣味判断、たとえば、「ジェフ・クーンズの彫刻は素晴らしい」という私の趣味判断の良し悪しを問うことができる。第二に、私たちは一人ひとりの主体の趣味、たとえば、特定のコレクターの趣味の良し悪しを問うことができる。本発表の主題は第二の問いである。

誰かの趣味の良し悪しを考えるうえで、私たちが用いるべき基準にはどのようなものがあるだろうか。よく知られているのは、デイヴィッド・ヒュームの「趣味の基準について」に由来するものである。これによれば、理想的批評家（あるいは美的エキスパート）の合意に基づいて個別の趣味判断の基準を得ることができ、主体は、その趣味判断の総体が理想的批評家の合意に近ければ近いほど、良き趣味をもっていると言える。

しかし、これとはまったく異なる趣味の基準を構築することも可能であり、そのための資源はニーチェの著作から引き出すことができる。アレクサンダー・ネハマスは、ニーチェの著作を手がかりに、スタイルの観点から趣味の良し悪しを考えることができると示唆している。すなわち、良き趣味をもつ主体とは、趣味の点で己のスタイルを獲得している主体であり、己のスタイルが欠如している主体は、悪趣味だということになる。

ただし、己のスタイルを獲得しているとはどういうことかという点が明確でないかぎりで、趣味のニーチェ的基準の内実はきわめて不透明であり、本発表の貢献の一つは、その肉づけを行う点にある。スタイルに関する哲学的議論では、スタイルは統一性や一貫性の観点から理解されることが多い。しかし、複数のニーチェ研究者の議論からわかるように、統一性に訴えるだけでは、趣味の良し悪しを見定めるための適切な基準を構築することはできない。そこで、本発表では、ニーチェの自己創造論に注目し、そこから適切な趣味の基準が統一性を超えて、いかなる要件を含むかを明らかにする。

そして、最後に、趣味のニーチェ的基準が、ヒューム的基準と比較してどのような利点をもつかを、二つの論点の考察を通して検討する。第一に、ネハマスの悪夢の問題、すなわち、万人が共通の趣味をもつ世界は美的に望ましくないように思われること、第二に、美的実践では、良き趣味をもつことを装うスノッブが存在するということである。私の考えでは、趣味のニーチェ的基準は、その基準に照らして理想的だと言えるような世界が「悪夢」と見なされる懸念がない点でヒューム的基準よりもすぐれ、また、スノッブの蔓延に対してヒューム的基準よりも抵抗がある点でも利点があると言える。